

人の店前なる障子行燈を張更、その需に應じて數个字を題する事、予が弱年の比までは聞も及ざりし事也、これらはわきて便宜の技なれば、のちくまでも行はるべし、亦挑丁入といふものを賣あるくも、十年以來の事也かし、挑丁チキウチンへ銅の鏝を著ることは、正保年間より起ると、武家故事要略にいへり、磁器の燒繼せんとて、巷路を耀あるくことも、二十年以來の事也、繼漆などいふものにて繼たりしに比れば、便利にして大によし、婦女子の髪を結ぶ事なども、予が幼稚き比は小頭坐を入れて、根をひとつにして、鬘と鬘をかき出し、鬘入マシイといふものを入れて、鬘を長くしたれど、今のごとく鬘挿といふものはなかりき、その後髪の結ざま大に變りて、少女も老女も、鬘と鬘を別にとりて、紙張なる鬘の形したるもの、鬘の形したる物を入れ、市中の女子は前髪を短くして、刷毛の如く上へかきあげておく事になりつ、衣裳に袖口かくる事、東にてはせざりしに、寛永年間より良賤これをすといひ傳たり、それも明和年間までは袖口を太くして丸く括りたるに、今は綿を薄くして括ることをせず、鉋といふものも、寛文年間までなかりしとぞ、和名かんなとは、かきなぐる義なるべし、吹革フキカキといふものも、元祿年間までは罕ウツなりしにや、元祿三年七月に開板したりし、火倫訓蒙圖彙に見えたる鍋の鑄かけは、火吹竹にて火を吹おこしてをり、觀世紙よりは、又三郎はじめたりと、西鶴が男色大鑑にいへり、かばかりの物も、むかしの人は、せざりけん紙を漉事のまねなればなるべし、縮紙檀紙は、平人の用ふべきにあらず、伊豆の修善寺紙立野の紙なども又しか也、いにしへは貴も賤も陸奥紙をのみ用ひたりしかくまでに物乏しからぬおん時にうまれあひたりけるは、いと有がたき洪福ならずや、時に筆硯を置てもて遺忘に備ふ、ここに漏せるも夥あるべし、

〔皇都午睡 三編上〕江戸は日本國の人の寄場にて、言葉も關八州の田舎在郷の訛りをよせて、自然となりし物ゆゑ、江戸詞と云ては甚少なし、其内古風を守り、叮嚀の詞も有り、大體京攝の詞を詰